KOBE COLLEGE NEWSLETTER

Vistas

"Beauty Becomes a College"

37
2020•June
◉Published by KOBE COLLEGE
神戸女学院大学

◉教育の伝統 3つの柱に基づいて策定
アドミッション・ポリシーが伝える 神戸女学院らしさ

理性、想像力、自然に驚嘆する感覚を称える文学者の言葉を学ぶ──5
イギリスロマン主義の研究 コウルリッジを中心に
文学部 英文学科　和氣(直田)節子 教授

健康で安全な暮らしのために、水質を守る見張り番──9
──水道水中の微量物質を検査する
地方独立行政法人 大阪健康安全基盤研究所 衛生化学部生活環境課　長谷川 有紀 さん

書くことは、生命の根源のようなもの──11
◉多方面での執筆活動が評価され、「大学クローバー賞」を受賞

◉認定留学制度を利用し、モーツァルテウム音楽大学で声楽を学ぶ
ネイティブの発声を身につけ、オペラの舞台へ──12

◉学科サイト内ラジオ番組「そーぶんちゃんねる」を通じて
総合文化学科の魅力を広く発信する──13

◉2020 Fashion Field Study in Bangladesh
ファッションを切り口に世界を知る──15

◉人間科学部 心理・行動科学科3ゼミ合同の課外活動
神戸大学海事科学部の「深江丸」で船舶実習に参加
未知の体験から、見識を深める──17

◉SDGsの取り組み─プラスチックごみ削減を目指して
「神戸女学院大学マイバッグデザインコンテスト」を初めて開催！──18

新型コロナウイルス感染症に対する本学の取り組み──19

教育の伝統 3つの柱に基づいて策定

アドミッション・ポリシーが伝える 神戸女学院らしさ

大学進学を希望する人、高校の進路指導関係者などの間で、各大学が示すアドミッション・ポリシーを大学選びの参考として重視する傾向が年々強くなっている。アドミッション・ポリシーとは、入学者の受け入れ方針をまとめたもの。今回は斉藤言子学長と、入試部長を務める三浦欽也教授の２人に、神戸女学院大学のアドミッション・ポリシーと、神戸女学院大学の女性教育の特徴などについて聞いた。

◉神戸女学院大学のアドミッション・ポリシー（抜粋）

本学のミッションステートメントとカリキュラム・ポリシー、及び希望する学科・専攻の教育目標・教育内容をよく理解し、大学における教育課程を履修するために必要な、高等学校卒業に相当する学力の３要素（基礎的な知識・技能、思考力・判断力・表現力、主体性・多様性・協働性）を備えた人を受け入れます。とりわけ、以下にあてはまる人を歓迎します。

1. 自分で決めた目標に対して自ら行動したい人
2. 専門的知識を深く学びたい人
3. 現代社会の課題に強い関心があり、複合的な視点から取り組みたい人
4. 多種多様な人とコミュニケーションし、世の人々のために尽したい人

変わらない伝統と時代への対応

——まず、神戸女学院大学のアドミッション・ポリシーについて、三浦先生からご説明をお願いします。

三浦　女学院の教育の伝統として、３つの柱があります。第一に来るのが「キリスト教主義」。愛神愛隣という女学院の永久標語のもと、キリスト教に基づく教育を実践してきました。神から託された責務にちゃんと応答すること。その人が置かれた場で、きちんと役割を見出し、それを果たすこと。そして、隣人（となりびと）と出会い、自分のためだけではなく、その人のため、他者のために働くことを第一義においてきました。

２つめの柱に「国際理解」があります。国際理解のいちばん本質的なことは、異質な文化を受容する、多様性を受け入れる、自分と違うものと共生することです。隣人のために働くためには、それが必要です。

３つ目の柱が、リベラルアーツ＆サイエンス。さまざまな見方、考え方を通じ、偏った見方にとらわれずに広い視野でものごとを見るという態度が培われます。この「態度」が、異質な文化を受容し、多様性を受け入れることにつながります。

この３つの柱が本学の教育の大きな特徴だと考えています。それを踏まえた上で、アドミッション・ポリシーがあるわけです。

アドミッション・ポリシーの４つの項目のうち、女学院らしさが特に出ていると思うのは、３と４です。

３でいう〝現代社会の課題に強い関心がある〟というのは、隣人の問題にコミットしていくことだといえます。そのために、リベラルアーツ的な〝複合的な視点から取り組んでいく〟ことが求められるわけです。

４の〝世の人々のために尽くしたい〟は、まさしくキリスト教主義でいう愛神愛隣のことです。〝多種多様な人とコミュニケーションする〟ためには、リベラルアーツも国際理解も当然必要とされます。

斉藤　私は本学の卒業生ですが、まさにこの４項目にあるような姿勢の中で教育を受けてきました。アドミッション・ポリシーは一貫しています。私たちの頃よりも今は、すさまじいスピードで変化していく世の中に対応できるしなやかなたくましさはより必要になってきています。良き伝統を継承してゆくためにこそ、変わらなくてはいけないこともあります。時の流れ、環境に適応しながら変革できる人が求められています。

三浦　今、学長がおっしゃった、昔から変わらないけれど、時代に合わせて変わるというのは、隣人のために尽くすには何が必要かが、時代とともに変わっていくからだと思います。そういう変化に、本学は的確に対応してきたと思っています。

アドミッション・ポリシーを知らなくても

——在籍中の学生はみなさん、アドミッション・ポリシーに合っていたから入学したのでしょうか？

三浦　入学した当時はみんながみんな、４つの条件に合うということではなかったかもしれません。ただ、そういう方向を向いた授業や教育プログラムを、入学してから受けますから、アドミッション・ポリシーで求めているものは、在学生の間に浸透していると思っています。

斉藤　入学時にはアドミッション・ポリシーを理解していなくても、大学生活の学びの中でごく自然にこのような生き方を大切に、誇りに思える人間として卒業していきます。入学式と卒業式で学生の雰囲気が全く違うのです。毎年、素晴らしく凛とした女性に成長してくれたと感激し、感謝の思いで彼女たちの旅立ちを見送らせていただいております。

女学院のタグラインに「私はまだ、私を知らない。」というのがあります。明確な目的を持って入学してくる学生もいますが、本学のリベラルアーツ教育で多方面から様々なことを学ぶ中で、自分が進む方向を見つけられるのではないかと思い、入学してきた学生もたくさんいます。自分の選んだ学科の学びで専門性を深める学生もいれば、異なる場所で才能を発揮する学生もいます。

たとえば、音楽学部のピアノ専攻を出て、現在、産婦人科医として活躍していらっしゃる卒業生や、逆に、人間科学部を出て、オペラ歌手になった方もいます。私たちは未知の可能性に溢れた学生を大切に育て、卒業後もそれぞれが本領を発揮して活躍しています。

三浦　文学部や人間科学部に在籍していても、副専攻プログラムなどを利用すれば、音楽も学べる。それは、やっぱり女学院の教育のすごくいいところですね。

自分のために、ではなく、次の世代に

斉藤　卒業生には、自分のことも大事だけれども、健全な世界・社会を作っていく次世代を育ててほしいと願っています。

三浦　飯謙院長がよくおっしゃる〝non sibi〟という言葉があります。ラテン語で「自分のために、ではなく」という意味です。自分のためでなく隣人のため、あるいは、その次の世代に向けて働くこと。あるいは社会全体を健全にしていくことは、他者のために働くことを広い視野で捉えたひとつの表れだと思います。そういう考えをもった人がその考えを本学で伸ばし、次の世代につなげていければ理想的かなと思います。

女学院では、知識を身につけるというよりも、ものごとに向き合う姿勢であったり、構えであったり、そういったものに重きを置いて教育をしているつもりです。知識はどんどん新しいものが入ってきて変わっていきますけれども、姿勢や構えは、基本的に変わらないもの。そういう賞味期限の長い教育をしています。その価値をわかってくださる方、あるいはそういうものを身につけるのがいいと思ってくださる方にやっぱり来てほしいと思います。

斉藤　そうですね。深く、広く様々なことを学んでいただいて、そして勇気を持って、違うと思ったことにはノーと言える女性になってほしい。イヤじゃなくてノーですね。ノーはちゃんとした知識の裏付けがないと言えません。責任を持ってイエスとノーをはっきり言える女性が、これからの世の中は必要だと思います。

高校生や保護者の方、高校の先生方などにお伝えしたいことは、今は先の見えない世の中ですが、女学院の学生たちは自分を見失うことなく、真のやさしさの中に強さとしなやかさを持って輝き続ける女性に育っていきます。卒業後も周りの方と共存し、互いに支え合いながら素敵な人生をきっと送っていくだろう、とずっとエールを送り続けたいと思います。

●学長／音楽学部 音楽学科 声楽専攻
斉藤 言子 教授——*SAITO Kotoko*

●入試部長／人間科学部 心理・行動科学科
三浦 欽也 教授——*MIURA Kinya*

アドミッション・ポリシーが伝える神戸女学院らしさ

私たちは、なぜ神戸女学院を選び、どんな時間を過ごしたか

◉オープンキャンパス学生スタッフを経験した卒業生が語る
この雰囲気、出会い、充実感を、受験生に伝えたい

後藤優里奈さん、森下ちなつさん、安達莉那さんは、今年から新社会人となったばかりの卒業生。在学中はオープンキャンパスの運営などをしている学生スタッフを経験し、受験生や保護者の方々に、女学院の魅力や特徴をわかりやすく伝える活動をした。そんな彼女たちに、進路選択に迷う中でどのように女学院への進学を決めたのか、どんな学生生活を過ごしたのか、などを振り返ってもらった。

後藤 優里奈 さん
- 文学部 英文学科卒（公募制推薦入試で入学）
  航空会社勤務

森下 ちなつ さん
- 文学部 総合文化学科卒（一般入試で入学）
  非鉄金属メーカー勤務

安達 莉那 さん
- 人間科学部 環境・バイオサイエンス学科卒（AO入試で入学）
  電気・電子部品メーカー勤務

きっかけは、オープンキャンパス

——みなさん、女学院が第一志望だったのでしょうか？

後藤・森下・安達　そうです。

安達　私は中3のときに、女学院のオープンキャンパスに初めて参加して、キャンパスに入った瞬間から、母ともう「ここだ！」って。それからは、女学院に入るために勉強しました。

後藤　私も一目惚れ。高2のときにオープンキャンパスで訪れた際、キャンパスと学生の雰囲気がすごく良くて。調べてみたら、やりたかった英語のカリキュラムも充実していたので、ここに決めました。

後藤 優里奈さん

森下　私がオープンキャンパスに来たのは、高3の9月。それまで女学院への入学は考えていませんでしたが、塾の先生から勧められて見学に来ました。私はいろいろなことに興味があって、大学でやりたいことが1つに決められずにいたんですが、総合文化学科なら入学してから様々なことを学んで、主専攻を3年生で決めればいいところに惹かれました。

——みなさんにとっては、進路を女学院に決めるにあたって、オープンキャンパスが大きかったんですね。

安達　オープンキャンパス以外にも、夏休みに環境・バイオサイエンス学科主催のサイエンス体験があって、実験や実習を体験できました。私は高1から高3まで毎年参加しました。

森下　オープンキャンパスの学生スタッフは年齢も少ししか変わらないのに、すごくしっかりしていて、こんな先輩になりたいと思ったのを思い出します。

女学院生である楽しさを誰かに伝えたくなる

——どんな人が学生スタッフになっていますか？

後藤　毎年、100人程度が学生スタッフになります。受験生のときに見た先輩の姿に憧れて、同じ存在になりたいって思う人も多いと思います。私は3年間学生スタッフとして活動しましたが、在学生が充実した大学生活を送っているのかが伝われば、受験生の女学院への興味も湧いてくると思ったので、私がどれだけこの大学が好きで、どれだけ普段勉強を頑張っているかを伝えるようにしていました。

森下　スタッフの活動を通して、女学院のことがさらに好きになりました。もっともっといいところを伝えたくなるんです。高校生は学生スタッフを前に、緊張して聞きたいことも言えなかったりするので、彼女たちの反応を見ながら、相手が何を知りたいのかを探り、不安を取り除いてあげるように心がけていました。

——アドミッション・ポリシー（前ページ参照）を読んで、大学選びの参考にしましたか？

後藤・安達　当時はアドミッション・ポリシーを詳しくは知りませんでした……。

後藤　知らなかったけれども、私の中にも当てはまる部分はあったかな、と今では思います。女学院で学べば、アドミッション・ポリシーに沿った学生たちが周囲にたくさんいるので、卒業するときには、多くの学生がこの4つの条件を身に付けていると思います。

森下　私も読んでいなかったです。でも、私の場合は総合文化学科を志望した理由が、アドミッション・ポリシーの4つの項目の3つめである〝現代社会の課題に強い関心があり、複合的な視点から取り組みたい〟に当てはまっていたのかなと思います。

2～3年生で受講したキャリアデザインプログラムのホスピタリティ・マネジメントコースで、妊婦体験、高齢者体験をしたり、医療現場のコミュニケーションについて学んだりしたのですが、それは4の〝多種多様な人とコミュニケーション〟をするために役立つ、一人ひとりに寄り添った対応をする力を身に付けることにつながったと感じます。

私の可能性、私の成長を感じた四年間

——女学院で学んでよかったことは？

安達　環境・バイオサイエンス学科では、専門だけにとらわれない研究ができました。それはこの大学だからできたことじゃないかと思うんです。

後藤　英語力がすごく上がったのを実感しています。通訳・翻訳の勉強ができる大学は意外と少なくて、女学院は設備も整っていて、専門家として活躍している先生から教えていただけたことが、私には特にいい体験でした。

森下　私は家族社会学に出会えたことがいちばんよかったです。その授業に出会ったときに、「あっ、自分はこれだ」といえるものに行き着いたと感じ、3年生で主専攻にしました。

——女学院らしさって、何だと思いますか？

森下　少人数であることが、真っ先に思い浮かびます。先生方やキャリアセンターの職員の方との距離も近く、就活で困ったときには、本当に寄り添ってくださった。人との出会いが素晴らしい大学だったと思います。

後藤　素敵な建物がたくさんあって、好きな場所がたくさんできました。

安達　私は、理学館の研究室が思い出深いです。4年生になってからは、毎朝10時からずっと詰めていました。豆乳でチーズをつくる研究では培養していた菌の都合に合わせないといけないからです。本当に濃い充実した時間でした。

後藤　私の4年間は、1年生のときはひたすら課題や部活動に励みました。2年生でオーストラリアに留学し、その後は就職活動。4年生は卒論に打ち込みました。どれもいい思い出です。女学院生はみんな忙しくしています。いつも何か目標、課題に向かって活動をしている印象があります。アルバイトやサークル活動だけではなく、勉強や卒論に熱心に取り組んでいます。

——受験生に、アドバイスをお願いします。

森下　まずはオープンキャンパスに来ていただいて、他の大学との違いを実感してほしいです。

森下 ちなつさん

後藤　学力や偏差値だけで大学を選ぶのではなく、違う魅力も発見してほしいです。学習環境や学生の雰囲気で4年間の過ごし方は、大きく変わってきます。自分に合っているかをしっかり見てほしいです。

安達 莉那さん

——最後に新社会人としての抱負をうかがいましょうか。

森下　幅広い視野とコミュニケーション力をこの4年間で身に付けられたと思っています。それを活かしながら、指示されたことをただやるだけではなく、自らの判断で行動できる人になりたいです。

後藤　以前は人前に立つのが苦手でしたが、学生スタッフを経験したことや留学などを通じて、人とコミュニケーションをとることが、とても好きになりました。

今後は接客業としてお客様とたくさんのコミュニケーションを重ねていき、よいサービスを提供できたらなと思っています。

安達　この分野だけは、私に聞けば絶対答えがわかる、そんな存在になっていきたいなと思っています。

■**和氣節子**（わけ・せつこ）――博士（文学）。神戸女学院大学大学院文学研究科博士後期課程修了。2012年より英文学科教授。2010~2011年 Cambridge University Lucy Cavendish College, visiting fellow. 専門はイギリスロマン主義文学・思想。研究分野は、S.T.コウルリッジの文芸批評、宗教論におけるカント、シェリングやシラーなどドイツ観念論哲学の影響、ロマン主義時代の教育論にみられる真言密教的要素。共著書に、『コウルリッジのロマン主義』（2020東京大学出版会）、『イギリス理想主義の展開と河合栄治郎』（2014 世界思想社）、*Coleridge, Romanticism and the Orient*（2013 Bloomsbury）、主要論文 “Contemplating Genius: Coleridge on Shakespeare”（*Poetica* 85, 2016）等。

理性、想像力、自然に驚嘆する感覚を称える
文学者の言葉を学ぶ
◉イギリスロマン主義の研究　コウルリッジを中心に

●文学部 英文学科
和氣（直田）節子 教授
――*WAKE–NAOTA Setsuko*

フランス革命後の激動の時代、人間性を失いかけた人々の、他者に「喜びを与える力」を目覚めさせたいと多くの著作を発表し、現代にまで大きな影響を残したサミュエル・テイラー・コウルリッジ。詩人であり、批評家、宗教家でもあった彼に惹かれ、和氣節子教授はロマン主義思想の研究に打ち込んできた。

▲和氣教授の共著書
・*Coleridge, Romanticism and the Orient*（2013 Bloomsbury）
・『コウルリッジのロマン主義』（2020 東京大学出版会）
・論文 “Contemplating Genius: Coleridge on Shakespeare”（*Poetica* 85, 2016）

◉ロマン主義文学を読むとき、私たちの内に起こること

――和氣先生のご専門分野は？

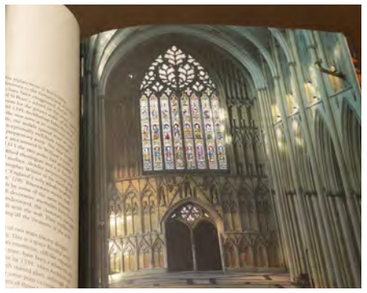
専門はイギリスロマン主義文学、思想です。フランス革命後の混乱を引きずる18世紀後半から19世紀前半、イギリスにおいて産業革命や奴隷貿易廃止運動、教育改革、選挙法改正運動、女性の権利の主張等が起こった、混迷の時代の文化、思想が研究テーマです。なかでも、詩人のウィリアム・ワーズワスとサミュエル・テイラー・コウルリッジを中心に研究しています。

ワーズワスとコウルリッジは、自然に湧き起こる感情の揺れを日常の言葉で綴った詩集『抒情歌謡集（*Lyrical Ballads*）』を1798年に出版しました。イギリス北西部の湖水地方や南西部サマセット州の自然をこよなく愛した二人は、神秘的で崇高な自然と向き合う精神の働きを描いた作品を書くことで、物質的な損得勘定が優先されがちな社会のなかで人々が人間性の証となる共感力を失っていくことに歯止めをかけようとしたのです。

授業では現代の社会問題との接点であるエコロジーの観点から、環境文学として彼らの作品を読むことから始めています。

――コウルリッジの作品を学生はどのように受け止めていますか？

ワーズワスは、子供の頃に遊びながら体感した大自然の神秘への恐怖や驚きを描き、コウルリッジは、たとえば、母校のあるケンブリッジ内のキングス・カレッジ・チャペルや、ヨーク大聖堂での吸い込まれていくような感覚のなかで、目の前の事物が「大いなるものと共に在るもの」として見えてくる心地よさを説明しています。そうすることで、自らの感覚、想像力、理性、美的判断力を結集させ、現実をより美しく喜ばしい現実へと発展させる全人的働きを生み出そうとする、個々人の意志力の大切さを生涯にわたり強調しようとしました。



▲ヨーク大聖堂のステンドグラス

自らの利害を忘れ、子供のように美しいものと戯れる感覚、たとえば、クリストファー・ロビンが100エイカーの森でクマのプーさんとその仲間たちと過ごした体験、『となりのトトロ』のメイがトトロや猫バスに乗っていた時のような記憶は、大人になっても共感性を高め、親切な行いへと我々を誘導する意志の力となります。そのことを、ワーズワスやコウルリッジのみならず後期ロマン主義詩人のキーツやシェリーも訴えていました。

彼らの作品を授業やゼミで読むと、学生は「いつのまにか、就活のしんどさを忘れた」「素直にほっとした」「先生の顔が優しくみえてきた」といった感想を口にします。それを聞くと、こちらも元気をもらえます。

◉老水夫の眼に捉えられて……、ロマン主義研究にのめり込む

――ロマン主義文学、思想を研究することになったきっかけは？

『抒情歌謡集』初版の巻頭におかれたコウルリッジの「老水夫行（*The Rime of the Ancient Mariner*）」を卒論で取り上げたのが、ロマン主義思想にはまったきっかけです。老水夫行は600行以上の長篇の幻想詩。「ぎらぎらする眼」をした老水夫が、たまたま出会った若者を押さえつけ、自らの航海の話を聴かせるという設定。友人の婚礼の宴に出席する予定であったその若者が聞かされた老水夫の話は、婚礼とは対照的な、惨めで力弱い、悲しくなるような人間の現実でした。

航海中の老水夫の身に起こったことは、目の前のものを愛そうとしても愛することができなくなってしまうような苦しい現実でした。そこに救いがあるとしたら、それは突然、美しいものからの呼びかけに応じる瞬間が与えられることなのか？――そのような、たとえ一生かけても答えを出せそうにない問題を、老水夫は我々読者に投げかけます。学生の頃からずっと、老水夫の「ぎらぎらする眼」が私を捉え続けています。

――コウルリッジの考えは現代に通じるものですか？

「老水夫行」は、イギリスロマン主義文学の代表的作品の一つです。彼は時代を代表する批評家、哲学者、宗教家としても、ミルトン論、シェークスピア論、社会批評、信仰論、教育論など後代に影響を与えた多くの著作を残しています。これらの著作は、当時主流であったイギリス経験主義哲学（知の源を五感による感覚的経験とする哲学）に対し、カントやシェリングといったドイツ超越論的観念論（感覚的経験を生み出す生得の普遍的な理性の働きを知の源とする哲学）を、より真実の人間性をとらえたものとしてイギリスに紹介するプロセスの中で出版されました。

彼の多岐にわたる言説は、現代の社会問題を論じる際の視座も与えてくれています。このことは、2月に出版された大石和欣編著『コウルリッジのロマン主義：その詩学、哲学、宗教、科学』（東京大学出版会）の1章で、「「遊戯」を通して神を知る―超越論者の美的教育論」で執筆させていただきました。彼の美的教育論は、現代のグローバル人材の育成のためにも、示唆に富むものであると考えています。

▲サミュエル・テイラー・コウルリッジ著『老水夫行（*The Rime of the Ancient Mariner*）』

『抒情歌謡集（*Lyrical Ballads*）』初版（1798年）の巻頭におかれたコウルリッジの代表的幻想詩。乗組んだ船が嵐に遭遇し、流れついた南極で老水夫は何の理由もなく、仲間たちが慈しんでいたアホウドリを射殺する。その罪によって老水夫は赤道直下の大海原で一人、生き地獄を体験するが、月光に照らされた海蛇の美しさを讃える言葉が溢れ出た瞬間から、祈ることが許される。そして仲間と共に祈り、神の被造物すべてを等しく愛することができる幸せを説き続ける悔い改めの日々が始まる。19世紀後半、ギュスターヴ・ドレの挿絵（写真）により、『老水夫行』は仏でも話題となった。

◉美を愛する人間性を高める美的教育論

――コウルリッジの美的教育論とは、どのようなものですか？

彼によると、美の感覚は「個々の部分の相互の関係、およびすべての部分と一つの全体との関係を同時に直観的に捉えること。それは直接的で絶対的な満足感を生むもの」です。このような、美とは個々の部分と全体(whole)との調和を表すという考えは、神戸女学院の記念歌 Beauty Becomes a Collegeのなかの〝the radiant whole〟という歌詞にも通じます。

「美しいもの」との予期せぬ感動的な出会いは、我々の思い通りにはならないもの。それに対して「快適なもの」の獲得や、内奥の「善なるもの」の成長には我々自身の意志と熱い想いが不可欠となります。

コウルリッジは、快適な生活をもたらす科学的認識を生みだす理性をカントにならい「思弁的理性(＝悟性)」と呼び、我々の道徳的感情や信仰心を高めさせる理性を「実践的理性」と定義します。そのうえで、その対照的な二つの理性、「思弁的理性」と「実践的理性」の両方を、自分のためだけでなく他者のためにも用いようとし、無私の境地で無意識に自らを他者にも開いた際に「美しいもの」を捉える我々の能力を「美的判断力」と呼びました。

コウルリッジは、そのような「美的判断力」を、「思弁的理性」と「実践的理性」とを相互浸透させる力、人間性を高める教育に不可欠な能力と高く評価します。

▲コウルリッジによる「思弁的理性」と「実践的理性」の図説。対称軸が「美的判断力」となり、斜辺で表す２種の理性を頂点(＝究極の人間性)に向け吸引していく

我々が体験する「美しいもの」との出会いの喜びの記憶は、命のエネルギーを下支えする「原初の共感力(primal sympathy)」が我々に内在する証となります。

コウルリッジがワーズワスを詩人として高く評価した理由は正に、このような「原初の共感力」の言語化を、彼がその代表的詩「幼少時の回想から受ける霊魂不滅の啓示(〝Ode: Intimations of Immortality from Recollections of Early Childhood〟)」において成功させたからといえます。

この詩において、ワーズワスは幼少期に、しばし眼の前の自然と自分との主客未分(自他の区別が生じる前の、主体と客体が分離せずに融合している状態)の恍惚状態から抜け出て、この世に戻ってくる折に感じた「自分から抜け落ちていくもの、はがされていく自然への不安」を子供特有の「高貴な本能(high instinct)」による「原初の共感」の証とみなしています。大人になっても魂のふるさとである「永遠不滅の海」での遊びを楽しめる「高貴な本能」故に、永遠なるものへの「原初の共感」を活性化する美的判断力の働きを詩の言葉で示すことができた稀有な詩人として、コウルリッジはワーズワスを評価していたのです。

◉本学シェイクスピア・ガーデンで、美の刺激を

――コウルリッジは英詩についてどんな考えを持っていたのですか？

コウルリッジは「万人の心を持つ」シェイクスピアの劇中の言葉のリズムも、私欲を超えていつでも美しいものを楽しむことができるように、他者へと自らを開かせる美的判断力の現れとみなしています。

コウルリッジは、英詩の韻律(リズム)の起源は一時の激情を抑制して「精神の均衡」を生み出そうとする詩人の無意識の努力であると指摘します。自らの感情の迸りとそれを抑制しようとする対照的な力は、お互いがその反目する力に「浸透する」ことで相互に依存し合い、その結果、「感情に喜びを与える力を融合させる」ことができる、とコウルリッジは主張しました。つまり、勝手な暴走しやすい想いに対しブレーキをかけ、回りの人に「喜びを与える力」をもつ高次な感情を創り出せる精神の美しさが我々にはあることを、シェイクスピアのリズミカルな言葉が表しているというのです。

その証拠として、シェイクスピアの『冬物語(*The Winter's Tale*)』から、シチリア王の王女でありながらも捨てられ老羊飼いに育てられたパーディタと、ボヘミア王ポリクシニーズとの次のような会話を紹介しています。

「縞石竹(しませきちく)のまだら模様の花は人工的につくられたものだから、好きになれない」というパーディタに対し、ポリクシニーズは「自然に加えられた人の技も、自然が創りだした技」(〝…art / Which you say adds to Nature is an art / That Nature makes.〟(4幕4場))と応えます。

このように、我々は「人工的に作られたもの」と「自然」という対照的な見方をする一方で、自然と人との主客未分の状態を「高貴な本能」でとらえ、「原初の共感」を蘇らせ、しっかりと〝本来の自分〟を保ちながら万物に自らを開いていこうとする美しい心のリズムを英詩から聴き取ることができます。

――身の回りに美を見出す感覚は、誰の内にも本当にあるのでしょうか？

パーディタは、美しいものから流れ出る力とそれに呼応する力とが織りなす神秘的なダイナミズムを、スイセンの花を用いて次のように表現しています。

▲▶シェイクスピアガーデンで可憐に咲く「パーディタ」(左)とラッパスイセン

「ラッパスイセン、燕も来ぬうちに咲いてその美しさで3月の風をうっとりさせる花」(4幕4場)と。

本学のシェイクスピア・ガーデンでは、入学式を彩る桜花の下に点在するムスカリに囲まれてラッパスイセンが咲き、それが終わるとシェイクスピア作品に関連する花名をもつバラが咲き始めます。「パーディタ」という花名をもつバラもあります。是非、ガーデンに足を運んで、生得の美意識に刺激を与え、自分を超えて魂が拡がる喜びを味わってみてください。

Flowers from Shakespeare's Garden: a Posy from the Plays, Pictured by Walter Crane
(Calendar 2020, Shakespeare Birthplace Trust).

◉コウルリッジ・空海・スピノザ

――今後の研究について、どんなことに関心をおもちですか？

コウルリッジの美的教育論のなかに、真言密教の祖・空海の、特に『性霊集』における教育論との共通項がみられないか、17世紀オランダの哲学者・スピノザの汎神論(森羅万象を神そのものと認識する思想)における、他者と共に喜びのうちに生きようとする力(コナトゥス)の説明を核に比較検討を続けたいと思っています。加えて、コウルリッジとスピノザとの関係をベースに、ロマン主義に続くヴィクトリア朝時代の詩人・批評家でコウルリッジを愛読したマシュー・アーノルドや、スピノザ『エチカ』を英訳し紹介した作家ジョージ・エリオットの宗教観との比較を試みたいと考えています。

健康で安全な暮らしのために、水質を守る見張り番
――水道水中の微量物質を検査する

●地方独立行政法人 大阪健康安全基盤研究所
衛生化学部生活環境課
長谷川 有紀 さん―― *HASEGAWA Yuki*

私たちの暮らしに欠かせない、生命の源＝水。
西日本の公衆衛生の中核機関である大阪健康安全基盤研究所で働く
長谷川有紀さんは、その水の安全を守るため、
水道水に含まれる化学物質を検査する業務に従事している。

◎公衆衛生の専門家集団の一員として

大阪健康安全基盤研究所は、その名の通り、地域の健康と生活の安全を守るため、公衆衛生に係る調査研究、検査、情報の収集・解析・提供などを行う機関。新型コロナウイルス感染症について、大阪府内のPCR検査の大半を担っているのもこの研究所だ。２０１５年に人間科学研究科博士前期課程を修了した長谷川有紀さんは、公衆衛生分野の専門家集団であるこの研究所の一員として働いている。所属は衛生化学部生活環境課。そこで主に、大阪府域の水道水及び河川から取る原水（水道水の元になる水）に含まれる、化学物質の検査・研究を担当している。

検査する水道水と河川からの原水は、大阪府内の水道事業体が定期的に採取し、大阪健康安全基盤研究所に持ち込む。水道水は残留塩素を除去し、原水は濾過して浮遊物質を取り除き、LC-MS/MS（液体クロマトグラフ質量分析計）にかける。

検査対象となるのは主に農薬とダイオキシン。農薬は検査しなければならない物質が１００種類以上に上る。ダイオキシンは、2カ月近く精製と濃縮を繰り返し、やっと分析装置にかけることができる。検査結果は成績書としてまとめて、各水道事業体に報告する。水質を維持・改善するための大切なデータだ。

「怖いのはヒューマンエラー。いちばん気を使うのが検体の取り違えです。どこの検体か区別するのはもちろん、作業のどの段階か間違えないように、検体を入れた瓶を移動させるたびに番号が書かれたシールを貼り替えるなど、細心の注意を払っています」

◎河川水中の農薬と代謝物の変動を追跡

水道水の検査の他、研究活動も大切な仕事。入所2年目（取材当時）の長谷川さんは、昨年から、淀川、猪名川の下流で2週間に1回、同じ地点の水を採取して、どんな農薬の成分が含まれているかを調べ、その傾向を分析している。

「この時期には、この農薬の成分が増えるなどの傾向を明らかにしていきたい。農薬が分解されてできる代謝物なども見ていきたい。もし毒性が強いものになっていたら、それは監視すべきなので、そのことを提言する前のモニタリングになればいいなと思っています」

◎水への興味は、中村哲氏から

女学院に入学するまでは、ずっと文系だった。「数学が苦手で。でも、理科は結構好きでした。文系を選択していたけれど、だんだん環境科学に興味が湧いてきて、女学院の環境・バイオサイエンス学科ならば、文系でも受け入れてくれるというので受験しました。大学の授業では、私は理系科目に弱いという前提で、基礎的な質問でも丁寧に教えてもらえました。おかげで、実験の楽しさを知りました」

●地方独立行政法人 大阪健康安全基盤研究所

■**長谷川有紀**（はせがわ ゆき）
地方独立行政法人大阪健康安全基盤研究所所員。2013年人間科学部環境・バイオサイエンス学科卒。2015年人間科学研究科博士前期課程修了。一般企業勤務を経て、2017年より神戸女学院大学人間科学部教学嘱託職員に。2018年4月より現職。

理系への方向転換のきっかけは、学校で行われた中村哲氏の講演を聴いたことだった。２０１９年に亡くなった中村医師は、アフガニスタンで井戸や用水路の整備などの活動で知られる、国際ＮＧＯペシャワール会の代表。

「医師である中村さんが、「１００の診療所より1本の用水路を」と話されたのを聞いて、水に興味を持ち始めました。小さな頃は海に近い街に住んでいて、海によく遊びに行ったのを覚えています。海は好きです。水への興味はそのあたりからつながっているのかもしれません」

植物による水質浄化に関して論文を発表するなど、在学中から現在の職業に直結するような研究をしていたわけだが、卒業後もそのままっすぐ水の研究を続ける道に進むというわけにはいかなかった。

大学院修了後は、水に関わる研究職に就くことを希望したが叶わず、一旦はまったく関係ない一般企業に就職した。しかし、やはり諦め切れず女学院の教学嘱託職員在職中に、大阪健康安全基盤研究所の募集があることを知り応募。ついに水の研究に携わる現職に辿り着いた。

> 経験を積んでも、謙虚な研究者でいたい。
> 研究データに対して謙虚さを忘れて、
> 勝手な思い込みで決めつけるようになってはよくないですから。

◎日々の研究に、謙虚に取り組む

「異動は少ないので、水道水の化学物質の検査を今後も続けていくことになると思います。経験を積んでも、謙虚な研究者でいたい。研究データに対して謙虚さを忘れて、勝手な思い込みで決めつけるようになってはよくないですから。ここは西日本の中核的衛生研究所で、たとえば、毒性の強い物質が高濃度で河川に出たらしいといった有事には、原因を早急に特定して対処する体制を整えなければいけません。しかし、普段からどんな物質がどのぐらい含まれていて、季節によってこのぐらい増減するということがわかっていないと、仮に何か事故があっとしても「この物質、いつもどれぐらいあった?」ってなりますよね。だから、年間の変動をちゃんとモニタリングしておくことが必要だと思うし、そのための調査を私はやれたらいいなと思っています。基本、真面目にコツコツ続けるのは得意なんです」と研究者としての使命感をにじませる。

長谷川さんたちの、たゆまず持続する仕事が、私たちの変わらない日常の安全を支えている。

●音楽学部 音楽学科声楽専攻3年生
（学年は取材当時）

Study abroad

◉認定留学制度を利用し、
モーツァルテウム音楽大学で声楽を学ぶ

ネイティブの発声を身につけ、オペラの舞台へ

「もっと音楽の勉強を深めたいけれど、やり方がわからない――」。そんなモヤモヤを抱えていた時に、声楽を指導する斉藤言子学長から、オーストリア・ザルツブルクにあるモーツァルテウム音楽大学で学んでみないかと認定留学を進められた。「今の年齢で行くから意味があるのよ」という斉藤先生の言葉に後押しされ、迷いを断ち切りオーディションに挑戦した。昨年３月から８月まで、約半年間に渡る留学生活やそこからの学びなど、話を聞いた。

――留学し、日本とどのような違いを感じましたか？

ネイティブとは、身体もですが舌の使い方が全然違うことに驚きました。日本語は発声が平べったいけれど、ドイツ語やイタリア語は舌を縦に使います。例えば「u」の発音は、私達には「オー」に聞こえるくらい違ってとても難しいんです。どんなに頑張っても「あなた、それは日本のドイツ語よ」と言われ、最初の頃はひたすら歌詞を読んで読んで……45分のレッスンのうち、歌わせてもらえるのは最後の10分位でした（笑）。

発声の微妙な違いは日本にいてはわからなかったこと。帰国後は、向こうで知り合ったウィーン在住で女学院OGのコレペティの先生に、歌声を録音して送り、チェックしてもらっています。

――印象に残っていることは？

声楽のレッスンは週2回でしたが、先生に「もっと声を前に飛ばして歌えるようになりたい」と言ったら、「毎日来なさい」と、親身になって指導してくださいました。レッスンはドイツ語と英語がごちゃ混ぜでしたが、歌に関することだけは理解できたので不思議でした。

日本でもあったらいいのにと強く思ったのは、ダンスの授業です。バーレッスンから始まり、男女でペアを組んで踊るのですが、ステップで足を踏まない方法など、舞台へ立つ際に役立つ内容でした。盛り上げるのが上手な先生で、90分間踊り続けて、冬なのにみんな汗だく（笑）。もの凄く楽しかったです。

▲声楽のレッスンの様子

――オペラの舞台も経験したそうですね。

校内の舞台で開催する門下生の発表会に出ないかと、先生からお声がけいただきました。演目の中で特に印象に残っているのは、オペラ『フィガロの結婚』のワンシーンで、私はスザンナ役。台本はイタリア語でしたが、絶対に納得できるものにしたかったので、言葉の意味や発音を徹底的に勉強し、学校の行き帰りには歩きながら口ずさみ、部屋ではひたすら読んで練習しました。言葉の抑揚に合わせて音が付いていることや、悲しい場面なのに明るいメロディなのは悲しさを隠したいんだなと、作曲者の意図も少し分かるようになりました。

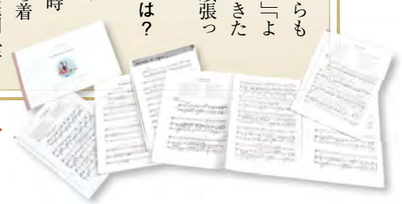
当日は、緊張したけれどすごく楽しかったです。お客様や先生からも「スザンナとして動けていたね」「よく勉強しているのが伝わってきたわ」とよい反応をいただき、頑張った甲斐がありました。

――今回の留学から得たことは？

当初はホームシックになり、何をしていてもしんどくて本当に大変でした。でも、自由な時間がたくさんあったので、落ち着いてからはよく近所のミラベル庭園へ行き、緑に囲まれたベンチでぼうっと考え事をしながら過ごしました。日本では学校と練習とバイトでいっぱいいっぱいでしたが、自分とじっくり向き合い、何が好きで何をやりたいのか？どんな人間になりたいのか？を見つめ直したり、支えてくれる親や友達に感謝の気持ちを持つようになったり――。とても貴重な時間を得ることが出来ました。

――将来の夢を聞かせてください。

全てのお客様によかったなと思ってもらえる舞台人になりたいです。留学中、たくさん舞台を観に行ったり、YouTubeを観たりし、人を惹きつけるオペラ歌手は、舞台に立つその瞬間を楽しんでいて、自己肯定感も強いんだなと分かってきました。自分の内面を満たしていくことは、舞台音楽に関わらず、人生においてとても大事なこと。私も楽しんで舞台に立ち、聴いてくださる方によいエネルギーを届けられるようになりたいです。



留学中に学んだ楽曲の楽譜▶

Award

書くことは、生命の根源のようなもの

◉多方面での執筆活動が評価され、
「大学クローバー賞」を受賞

●人間科学部 環境・バイオサイエンス学科3年生
（学年は取材当時）

昨年10月25・26日「岡田山祭」が開催され、初日の中庭ステージにて「大学クローバー賞」の表彰式が行われた。初の個人受賞となったは、文芸部の部長。読売新聞「気流」に5回掲載、「第9回言の葉大賞」入選、「第5回住友理工学生小論文アワード」最終選考通過、「NRI学生小論文コンテスト2019」「2019織田作之助青春賞」への応募など、その積極的な創作活動が称えられ、今回の受賞となった。

【大学クローバー賞】……女学院に在籍する学生の課外活動を奨励することを目的とし、顕著な活動や成績を収めた本学自治会登録団体、又はその団体に所属する個人に対し、その栄誉を称えて贈られる賞。

――おめでとうございます。受賞の知らせを受けていかがでしたか？

ありがとうございます。小さい頃から書くことが大好きで、俳句やエッセイなどで賞をいただいた経験はあったのですが、今回はこれまでの活動を総括した賞だったので、とても嬉しかったです。

――特に印象に残っている作品は？

住友理工学生小論文アワードに応募した「未来に求められる力〝WATCH〟～海外企業との比較を通して～」です。テーマはSDGs（持続可能な開発目標）で、私はジェンダーについて述べました。小論文は初めてで、どうしても文学的な表現になるため、先生に添削をお願いし、それを修正して、2週間で1万字を書き上げました。最終選考まで残ることができ、頑張った甲斐がありました。

――その後、学内の「神戸女学院の100冊」書評コンテストでも優秀賞を受賞されていますね。

はい。英米文学文化分野から「ハックルベリー・フィンの冒けん」について書きました。昨年、文学部講演会の実行委員になり、本学名誉教授・内田樹先生と訳者である東京大学名誉教授・柴田元幸先生をお招きしたのですが、その時に出し合った案を英語でまとめました。苦労したのは、やはり英語。例えば、黄金時代をthe grided ageと表現するなど、専門用語の変換が難しかったです。

――幅広いジャンルで執筆されていますが、きっかけは何だったのでしょう？

幼い頃、寝る前にいつも母が本を読んでくれ、次第に自分で読むようになり、とても自然に書く方へと移行しました。母は、私がお腹にいるときから本を読み聞かせていてくれたらしく、今から思えば日々愛情を注いでくれていたんだなと思います。

――今はどんな作品を？

ちょうど、家族間の出来事をテーマに80ページ程の小説を書き上げたところです。次も小説で、師弟愛ものにしようと考えています。内容はまだ言えませんが、人間独自の感情である情緒を大事にした作品を執筆中です。

▲これまでの活動に対して授与された数々の賞状

――文学部ではなく人間科学部に進んだのは何故ですか？

高校は理系だったんです。文系に進みたくて迷いましたが、2年間、数学や物理に真摯に向き合ってきたという思いがこみ上げてきて。それに、理系でも論文を書くときに文系的なスキルは役に立つし、文系でも理系的な思考は役に立つ。どちらも密接に関わっているので、そんなに垣根を感じませんでした。

――文芸部ではどのような活動を？

私が入った時は4年生1人だけだったので、1年生から部長になりました（笑）。そこから徐々に増えて、今では6人。神戸大学の文芸研究会と共同活動し、お互いの部誌に作品を発表し合って岡田山祭や六甲祭で販売したり、Twitterで活動を配信したり。先日は皆で読売新聞のコラム欄に投稿しました。新人部員も入ってくるので、読書会等どんどん活動を増やして行く予定です。

――今後の抱負を聞かせてください。

今はAI（人工知能）を用いた画像分類の分野に取り組んでいて、将来はDeep Learning（深層学習）を用いることのできる研究者になりたいと思っています。

もちろん、書くことは今後も続けていきます。生活の一部になっているし、私にとっては生命の根源みたいなもの。大げさかもしれないけれど、「生きているからには何か書きたい」と思うのです。

時事ネタから恋バナまで、なんでもありの学内ラジオ。

NOW ON AIR そーぶんちゃんねる

◉学科サイト内ラジオ番組「そーぶんちゃんねる」を通じて

総合文化学科の魅力を広く発信する

2018年6月からスタートした総合文化学科（以下、総文）のサイト内コンテンツ「そーぶんちゃんねる」は、高校生をはじめ、在学生、教職員に、総文のことをより深く、楽しく知ってもらうことを目的としたラジオ番組。ラジオは音声のみの媒体であるため、テレビやインターネット動画（YouTubeなど）と比べると、登場する人物の個性や人柄をより伝えやすく、その特性を生かして、教員が総文での「学び」について話したり、学生たちがキャンパスライフや大学の魅力などを発信したりしている。「そーぶんちゃんねる」での活動に加え、大学や総文の魅力について、話を聞いた。

そーぶんちゃんねる　検索
http://i.kobe-c.ac.jp/radio/

収録から編集までを、自分達で

――「そーぶんちゃんねる」はどのようにスタートしたのですか？

4年生　放送部という部活があり、学科の先生から部員に声がかかりました。

3年生　私だけ放送部ではなく、バレーボール同好会なんです（笑）。将来は、マスコミ関係への就職を目指しているということを知ったゼミの先生が声をかけてくださいました。

――収録はどのように進めるのですか？

3年生　高校生が飽きないよう、収録時間を5分前後に設定し、ボイスレコーダーか携帯電話の録音機能を使って録音します。私は取材対象が学生だったこともあり、事前に質問内容などを軽く打ち合わせし、スマートフォンやボイスレコーダーで録音しました。失敗したり詰まったりしたところは一度止めて編集の際に調整しました。

4年生　すごい！私も最初のゲストは学生だったのですが、お互い意識しすぎて硬くなり、今聞き直すと悲惨なことに（笑）。2回目のゲストは先生ということもあり、自然体で話せるよう、失敗したら止めて再開し、後で編集しました。その後、パソコンに詳しい部員にBGMを付けてもらって……。

▲家で編集作業中の様子

3年生　その流れ、担当の先輩が放送部を引退されたので、無くなってしまったんです！アプリのダウンロードや音の調整の仕方、BGMの付け方等のマニュアルをもらって、各自、家で黙々と作業しています。

4年生　わ、少しずつ進化していますね！

――ひとり数回ずつ配信を担当されていますが、お二人はどんなテーマを？

3年生　プロジェクト科目という授業を取り上げ、台湾へフィールドワークに行った学生に話を聞きました。配信を聞いてくれた友達が「そんな科目があるんだね！」と驚いていたので、在学生にとっても聞く価値のある内容になったかなと思います。あと、大学祭の実行委員にも取材したのですが、突っ込んだ内容まで聞くことができ、そのやりとりから人柄や自由な学風も伝えられたと思います。

4年生　私は高校生が「社会学とはどんな学問なのか」を知るきっかけを作りたいと思い、戸江哲理先生にお話を伺いました。印象的だったのは、「社会は人と人との繋がりから成り立っており、その全てが社会学に結びつく」ということ。例えば、私が朝、母におはようと挨拶してご飯を食べている時は、家族として母と繋がる。大学の講義では、学生として教員と繋がる。歯医者に行くと、患者として先生と繋がる。毎日の生活はたくさんの繋がりから成っていて、日常生活そのものが社会。身近なことが学問になると分かり、私自身すごく面白かったです。

●文学部 総合文化学科3年生
（学年は取材当時）

自由に学んで興味を広げ、深める

――総文の魅力とそこから得たことを聞かせてください。

4年生　やはり、多様な領域を自由に学べるリベラルアーツ教育だと思います。私は社会学を学べたことが大きいですね。社会学を専門とされている景山佳代子先生のゼミに所属しているのですが、先生の「これらの問題を一旦知ると、それ無しの人生は歩めない」という言葉が心に残っています。これは社会問題だけでなく、全ての経験に言えること。自分の考えは何かのきっかけで結びついてゆくのだから、あらゆる経験を吸収したいと思うようになりました。

3年生　これ！と狙って入ることも出来るし、学びながら好きな分野を発見したり、未知の分野を知ったりすることも出来ますよね。私は中学生の頃からマスコミを目指していて、そのために視野を広く持ちたいと思っていました。総文なら日本国憲法や社会学も学べる。社会福祉関係の分野も学習できるし、プロジェクト科目を取ればインドにも行けるんです。実際に、日本国憲法の授業で六法を手にし、ものすごく難しかったけれど視野が広がりました。

4年生　少人数制なので友達と同じ授業を取る機会が多く、それも楽しさに繋がっていると思います。同じ先生の授業を2つ取ることも出来るから、先生との距離も近くなるし、同じ分野の学問でも違う側面を知ることで新しい発見もありました。

3年生　一学年200人程度なので、友達の友達は友達になれます（笑）。大規模校だと知らない顔も多いと思います。

――受験生にアピールしたいことは？

3年生　女学院はいろんなことにチャレンジできる自由な大学です。私も景山先生のメディアのゼミに所属していて、卒業論文はスポーツを取り上げる予定ですが、沖縄問題や原発問題、映画について書く人もいます。ゼミの懇親会や、先輩の卒論を見る機会も多くあり、「こんなテーマもあるんだ！」と常に刺激をもらっています。

4年生　そう。卒論は自分が興味を持ったことを自由に書くスタイルです。私は何に興味があるのかを突き詰めて考え、辿り着いた答えが漁業に纏わることでした。それで、地元の京都府舞鶴市で何百年も続く漁師のお祭り「雄島参り」をテーマにしました。興味に気付いたきっかけは景山先生との会話。「雄島参り」へ行った話をしたら、地域の小さなお祭りには深いものがあるよと言われ、様々な資料を調べてみたところ、どんどん楽しくなって。実際に漁師さんに取材をし、漁にも連れて行ってもらったんですよ。

3年生　学問だけでなく、私は昨年の春にバレー同好会を創設しました。挑戦でしたが、学生生活支援センターの方が頑張ってと後押ししてくださいました。

――今後の抱負を聞かせてください。

4年生　私は今春からアナウンサーとして、佐賀県での勤務が決まりました。社会学について学んだ経験は、今後すごく生きてくると思います。これからの人生、興味を持ったことに対して、自ら現場へ足を運んでいきたいです。

3年生　私はゼミで、見たもの全てを信じるのでは無く、疑うことや異なる視点から見ることも必要だと学びました。メディアを目指すなら、きちんと批判も出来ないといけないと思うので、卒論のテーマはまだ模索しているところではありますが『スポーツ報道が与える女性スポーツへの影響』にしようと考えています。昨年末、女子プロ野球選手が半数以上も退団した問題も、知らない人が多い。いろんな分野に興味を持ち発信できる人間になりたいです。

▲卒論の調査で取材した漁の様子（京都府舞鶴市）

●文学部 総合文化学科4年生
（学年は取材当時）

Comment from 総合文化学科

今後も総文の先生や学生へのインタビューを通して、総合文化学科で学べることや、総文の学生のキャンパスライフなどを随時配信していきます。リアルな声で伝えられる総合文化学科の魅力に、要注目です！

◉ 2020 Fashion Field Study in Bangladesh

ファッションを切り口に世界を知る

バングラデシュを体験し、日本の自分を考える

あなたのタンスの中を探したならば、“バングラデシュ製”のタグの付いた洋服をかなりの確率で見つけることができるだろう。2000年以降、経済成長著しいバングラデシュは、アパレル生産国として、中国についで世界2位の地位を占めるまでになっている。しかし、発展の影で現地では、さまざまな問題を孕んだまま、社会、生活に大きな変化が起こっている。文学部英文学科のグローバル・スタディーズ分野のField Study A「ファッション・フィールドスタディ・イン・バングラデシュ」は、実際にバングラデシュを訪ね、衣服を紡ぐバングラデシュの人々と、その衣装を纏う私たちの出会いの中で、現実を知り、記録し、私たちの身近な問題として捉え考える、他にはない学びの機会だ。

▼フィールド研究で、殻を破る

メイド・イン・バングラデシュ〟をテーマとする「ファッション・フィールド・スタディ・イン・バングラデシュ」の募集が行われたのは、2019年秋。対象は全学年全学部の学生。10、11月に2回の説明会を行い、50名が出席。その後、個人面接を経て、英文学科の2年生5名と1年生3名の参加者が決定した。

「グローバル・スタディーズの授業では、世界を見て、日本そして自分を見ることを1つの目標としている。バングラデシュのファッション産業が日本とどう関わっていて、自分が置かれている日本の状況はどういうものかを考えることで、学生にとって、自分の殻を破る大きなきっかけになるのではないかと思います」と、このフィールドスタディの意義を説明するのは、Marcelo FUKUSHIMA准教授。

ファッション・フィールド・スタディ・イン・バングラデシュを担当し、現地にも同行した教員は、英文学科のFUKUSHIMA准教授と南出和余准教授。国際経済を専門とするFUKUSHIMA准教授がフィールドスタディを担当するのは4度目。これまでにフィリピン、パリ、ニューヨークに同行してきた。また、文化人類学・映像人類学が専門の南出和余准教授は、学生時代からバングラデシュの地域研究に取り組み、毎年2回は現地を訪問し続けてきた。今回は、その経験と産業界・映像制作者・研究者などとの間で築いてきたネットワークを活かし、調査・見学する施設、インタビュー対象者などの選定・調整から移動・宿泊の手配まで行い、現地の人とのベンガル語通訳もこなした。

参加学生は事前研修として、バングラデシュの基礎知識、世界のファッション産業の現状・問題点についての講義を受講。挨拶、自己紹介程度の簡単なベンガル語、撮影機材の使い方も学んだ。また、世界に通用するブランドを目指して、バングラデシュをはじめとする途上国でアパレル製品の企画・製造を行う、マザーハウスの大阪店で、担当者にレクチャーを受けるなどして、バングラデシュ行きの準備を進めた。

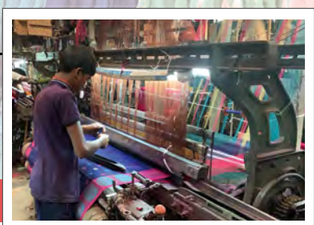
▲フィールドスタディを担当した文学部 英文学科の Marcelo FUKUSHIMA 准教授(左)と南出和余 准教授(右)

Fashion Field Study in Bangladesh：スケジュール

- 2/23(日) 午前 関西空港発 / ◉ダッカ宿泊
- 2/24(月) 午前 ガイダンス / 国立博物館を見学 / ブックフェア見学 / マーケット見学 / 午後 ファッションマーケット 見学 / 夕方 現地の研究者ハサン・アシュラフ教授と会食 / ◉ダッカ宿泊
- 2/25(火) 午前 〈移動〉ダッカ→タンガイル / 午後 タンガイルサリー工場訪問 / 夕方 サリーの卸定期市見学 / ◉タンガイル宿泊
- 2/26(水) 午前 サリー工場で撮影・インタビュー / 午後 チルドレンズホーム訪問 / ◉タンガイル宿泊
- 2/27(木) 午前 〈移動〉タンガイル→ジャマルプール / 刺繍する女性の手仕事見学・撮影 / 午後 手工芸品マーケットの見学と撮影 / 夕方 〈移動〉ジャマルプール→タンガイル / ◉タンガイル宿泊
- 2/28(金) 午前 〈移動〉タンガイル→ダッカ / 午後 衣類工場の労働者と国立戦没者記念公園で懇談 / ◉ダッカ宿泊
- 2/29(土) 午前～午後 輸出型アパレル生産工場(Green Factory)訪問 / 午後 映画『メイド・イン・バングラデシュ』のモデルとなった女性と懇談 / 夕方 結婚披露宴に出席 / ◉ダッカ宿泊
- 3/1(日) 午前 プレゼンテーションの準備 / 午後 ハサン・アシュラフ教授によるレクチャー 現地研究者に対してプレゼンテーション / ◉ダッカ宿泊
- 3/2(月) 午前 帰国後のシンポジウムの準備 / 午後 ダッカ在住の日本人女性と懇談 自由行動 みやげ購入など / ◉ダッカ発
- 3/3(火) ◉関西空港着→解散

◀ジャマルプール農村で刺繍をする女性たち(撮影：柴田真結)

タンガイルサリー卸定期市


タンガイルサリー機械織り(撮影：長谷川璃紗)

◀▲衣服を紡ぐ人たちを取材・撮影をする学生たち

▼アパレル工場の今を記録撮影

そして2月23日、関西空港を発った一行は、夜半、バングラデシュの首都・ダッカに到着した。9泊10日のフィールドスタディの始まりだった。

日中は、移動とフィールドワーク。学生たちは4人ずつに分かれ、それぞれ2台のカメラを使用し、取材対象を撮影すると同時に、活動する自分たちも映像に記録した。夜は宿舎で、その日の反省会と次の取材・撮影のプランのまとめ、翌日に備えた。

訪問先はダッカの他、タンガイル県、ジャマルプール県などの地方にも足を延ばした。アパレルショップやバイヤー向けの市場、名産として知られる民族衣装のタンガイルサリーの織物工場、内職で刺繍する女性の手仕事、地球環境・労働環境に配慮した先端モデルとなる衣類工場などを見学・撮影。そこで働く若者たちに話も聞いた。

アパレル産業のさまざまな現場を調査・取材するだけでなく、国立博物館、国立戦没者記念公園なども訪問、バングラデシュの歴史や社会を総合的に学ぶ機会も持った。さらに、現地の方の結婚式にサリーを着用して参加、ダッカ在住の日本人女性との懇談などもあり、バングデシュ市民の暮らし、女性のあり方、社会の階層性などについても実感することができた。

「2016年にダッカで起きたテロ以降、バングラデシュ政府は外国人旅行者の安全確保に細心の注意をはかり、特にダッカの外に出る時には現地警察が擁護してくれます。フィールドスタディ説明会に出席した学生のなかには、参加を希望しながら安全面を心配する保護者の反対によって参加を諦めた学生も少なくない。どんなことでもリスクをゼロにすることはできないけれど、最大限の対策と準備、自覚をもって実施する。その先にこそ得られる経験、開かれる世界があるのです」と南出准教授。

8日目には、フィールドスタディで感じたことについて、現地大学の先生の前で全員が英語で短いプレゼン。充実した毎日は、滞在最終日の9日目の自由時間で一息つくまで続いた。

「バングラデシュといえば、未だにアジアの最貧国というイメージが強く、社会開発、貧困問題に取り組むNGOによるスタディツアーもたくさんあります。しかし、今回はファッションというテーマを用意することで、村、都市、産業、コミュニティ、生活者など、従来にない多角的な視点からバングラデシュを見ることができたと思います。学生たちはバングラデシュを遠い国ではなく、自分たちとつながっていると感じ、グローバル化するファッション産業の重要な生産地であるだけでなく豊かな文化を持つ国であることを感じとっていたように思います」と南出准教授。

▼ダッカミドルクラスの結婚式にサリーを着て出席

▲バングラデシュ戦没者記念塔前にてコーディネーターのロキブさんと

▼アパレル生産工場で最新の機械化を見学

▲世界トップクラスのGreen Factory・アパレル生産工場

▼映像で理解を深め、発信も

学生たちは帰国後も忙しい。英文学科の学生が字幕をつけたバングラデシュ映画『メイド・イン・バングラデシュ』が、大阪アジアン映画祭で上映されたのに合わせて、3月13日、本学英文学科と同映画祭の共催で大阪市内で開催されたシンポジウム『メイド・イン・バングラデシュを考える』に7名の学生が参加。自分たちが撮った写真・映像を交えてフィールドスタディの報告を行った。今後は、撮影した映像素材を編集し作品として、学内で上映会の実施をめざしていく。

「滞在中に見たこと、感じたことを学生が消化することはむずかしい。編集する過程で映像を何回も見直し、その意味を考えてもらいたい」と南出准教授は話す。どんな作品としてまとめ上げられるのか、完成が楽しみだ。

◉SDGsの取り組み―プラスチックごみ削減を目指して

「神戸女学院大学マイバッグデザインコンテスト」を初めて開催！

2030年に向けて、SDGs（持続可能な開発目標）の達成が大きなテーマとなっており、国内でも多くの企業や大学等が取り組みを開始しています。本学でも教育・研究活動の中でSDGsに貢献する活動はこれまでも行ってきており、今後は大学広報としてそのことを広く発信していく予定です。加えて、SDGsに貢献する新たな取り組みも行います。

その一環として、昨年12月～1月に初めて「神戸女学院大学マイバッグデザインコンテスト」を開催しました。深刻な海洋汚染の原因であるプラスチックごみの削減を目的としたレジ袋有料化が始まり、それを前にマイバッグ（エコバッグ）の活用が進んでいます。これは、学内でのマイバッグ利用促進や環境問題への啓発を行うことも目的に、在学生・教職員・卒業生からバッグのデザイン案を募集し、優れた案を表彰するコンテストです。

今回は35作品の応募があり、厳正な審査の結果、その中から最優秀賞1作品、優秀賞5作品、佳作5作品が選ばれました。最優秀賞と優秀賞6作品のデザインを用いたオリジナルマイバッグを制作し、受賞者に副賞として贈られました。

※学生のコメントは作品応募時に記入された「作品に込めた想い」から抜粋（学年は受賞決定当時）

最優秀賞 ●総合文化学科 4年生
女学院の窓から見える四季の移り変わりをイメージして描きました。マイバックを積極的に利用することで、地球温暖化を防ぎ、女学院の綺麗な自然を守っていきたいという思いを込めています。

優秀賞 ●心理・行動科学科 1年生
テーマが神戸女学院にある豊かな自然だったので、背景を緑にしてどの季節でも緑に包まれている女学院を表してみました。

優秀賞 ●総合文化学科 4年生
女学院に咲く沢山の植物たちを校章を取り囲むようにして描きました。見た人が豊かな自然を通じて、より大学やキャンパスへの愛が深まりますようにと想いを込めました。

優秀賞 ●総合文化学科 3年生
球の中に女学院を入れて地球を表現し、周囲にシェイクスピアガーデンで咲く花々を散りばめました。花に色を塗らなかったのは、この地球の危機を示したかったからです。

優秀賞 ●環境・バイオサイエンス学科 2年生
女学院のどこかにいる動植物を詰め込みました。どこにいるのか探してみてほしいです。

優秀賞 ●環境・バイオサイエンス学科 3年生
実際に岡田山に生育する植物と、女学院の校章をモチーフにして描きました。女学院の四季もイメージしています。

佳作

環境・バイオサイエンス学科 2年生　英文学科 1年生　環境・バイオサイエンス学科 1年生　人間科学研究科 研究生　英文学科 3年生

◉人間科学部 心理・行動科学科3ゼミ合同の課外活動

神戸大学海事科学部の「深江丸」で船舶実習に参加

未知の体験から、見識を深める

神戸大学海事科学部 練習船「深江丸」

昨年10月7日、人間科学部 心理・行動科学科の3ゼミが合同し、神戸大学海事科学部の練習船「深江丸」に乗船する船舶実習を行った。当実習は2014年度から毎年実施されており、6回目となった昨年度は、4年生3人、3年生20人の計23人が参加。私達の日常生活と海事との関連や、船を動かす際の船員間のコミュニケーション方法等を体験的に学習した。学生を引率した矢野円郁准教授に、実習の目的や意義について話を聞いた。

●人間科学部 心理・行動科学科
矢野 円郁 准教授

――実施の経緯をお聞かせください。

私は2011年度まで中京大学心理学部応用心理学領域で助教をしていました。当学部では応用心理学実習として船舶研修を実施しており、私も引率教員の一人として「深江丸」に乗船していたため、神戸大学海事科学部の教職員の方達と交流があったのです。2013年度より本学に着任したことから、海事科学部の先生が連絡をくださり、女学院でも利用の機会をいただきました。

――「深江丸」は、どのような役割を担う船なのですか？

主に外国航路の海運会社で活躍する海技者――つまり、船長や機関長等として船上で働いたり、その技術を基に陸上でも働いたりする人を養成するための学部が所有する練習船です。

――心理・行動科学科で船舶実習をする目的や意義とは？

学生に、普段できない経験をする機会を与え、見識を深めることが狙いです。船を動かす際の船員同士のコミュニケーション方法や生じうるヒューマンエラー、海上における空間認知や交通安全など、心理学的にも興味深い話を聞くことができるため、研究テーマの発見にも繋がるでしょう。

毎年3人程度、スタッフとして海事科学部の学生が乗船してくれるのですが、圧倒的に男性が多い分野とはいえ、女子学生が乗船することもあり、本学学生があまり知らない分野で活躍する女性を知る機会にもなっています。

――当日の実習内容は？

出港から入港までは約3時間。海事科学部の港から六甲アイランド付近まで行って戻る間に、座学と体験学習を行います。

座学では、船の種類をはじめ、船員の海上勤務の実態、輸出入品の99%が海上輸送であり、日本の生活が海運によって支えられていることの解説や、航海図の見方、船の現在地を認識する方法、海上の交通安全などの話を伺います。

船機操舵室で船員から説明を受ける学生たち

体験学習では、船橋において船長が各部署にどのような指令を出し、船員がどのように応じて船を動かしているのかを観察すると共に、実際に操縦も行います。車とは異なり、方向転換を始めてから実際に方向が変わるまでに時間がかかることなどを体感できます。また、機関室に入り、船が動く仕組みや安全に作業する際の注意点なども教わります。

――これから参加するゼミ生に伝えたいことは？

天候に左右される実習ですが、毎年10月頃に実施しており、晴れると気持ちのよい航海が楽しめます。この実習は、客として観光船に乗るのとは異なる体験ができる貴重な機会。これまで船に興味がなかった人にとっても、楽しく有意義な時間になっていますので、ぜひ体験してください。

参加した学生の声

一つの船を動かすのに、たくさんの人が関わっていることが分かりました。

海での現在地の把握の仕方から、海上の仕事の流れまで、様々な話を聞くことができ、とても刺激的な時間でした。

フェリーや遊覧船に乗ったことはありましたが、このような形で乗船したことはなかったので、新鮮で面白かったです。エンジンルームでの発電の説明から、冷却水なのに温度が高く、発電の熱が大きいことを実感できました。たくさん質問させていただきましたが、もっと聞きたかったです。

船は何よりも物資の移動に貢献しており、日本の食生活には船での貿易が必要不可欠なのだと学びました。4月から就職しますが、知らない様々な仕事に改めて興味を持ちました。

船での距離や方向の見方を知り、自分が思っているのと実際とでは異なるということを体感しました。また、舵を取るのが難しく、車の運転とは全然違うこともわかりました。エンジンがある場所は、熱くて音がとても大きいことも実感しました。

港に様々な企業や工場がある意義などを教わり、就職活動をするなかで、様々な職種や業種を知るという段階に来ていたので、ためになりました。

●神戸女学院大学広報委員会 〒662-8505 兵庫県西宮市岡田山4-1
●E-mail kckoho@mail.kobe-c.ac.jp https://www.kobe-c.ac.jp/

新型コロナウイルス感染症に対する本学の取り組み

── 学生の学びを維持するために ──

新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い、本学では卒業式や入学式等の各種行事を中止しました。
緊急事態宣言発令による学院閉鎖措置の後は、学生の学びを維持するための各種取り組みを行っています。

1. 各種行事

◉卒業式の中止

3月18日(水)に予定していた2019年度の卒業式を中止し、「卒業生のための祈りの集い」をソールチャペルにて守りました。併せて、本学公式サイト上にて飯謙理事長・院長、斉藤言子学長、永井敬子公益社団法人神戸女学院めぐみ会会長による卒業生へのメッセージに加え、卒業生代表2名によるメッセージも掲載しました。

◉入学式の中止

4月3日(金)に予定していた2020年度の入学式を中止しました。以降の履修等に関する情報は、本学公式サイト等での提供を行いました。

2. 学生への情報発信

◉特設ページの開設

本学公式サイト内に「新型コロナウイルス感染症関連情報」特設ページを開設し、学生向けに情報の集約と提供を行っています。

◉遠隔授業に関する特設ページの開設

前期授業の遠隔化(後述)に伴い、本学公式サイト内に「遠隔授業関連情報」特設ページを開設し、学生と教員に対して情報の集約と提供を行っています。

3. 学生の学びを維持するための取り組み

◉前期授業の遠隔化

前期の全授業を遠隔化としました。授業期間は5月7日(木)から8月7日(金)です。
遠隔化に対応するため、これまで授業の補助ツールとして利用してきた「Moodle」を引き続き活用できるようにサーバの増強を行いました。また、「Zoom」等のオンライン会議ツールを利用する教員のためにマニュアルも整備しました。

◉「緊急支援給付金」の給付

授業の遠隔化に伴い、ネット環境の確保や学修の場を整える等に備えることを目的に、学生・大学院生全員に「緊急支援給付金」として一律50,000円を給付することを決定しました(予算総額1億3000万円規模)。

◉遠隔授業サポート体制の整備

ICTに詳しい職員を学内から集め、「遠隔授業サポート室」を設けました。授業を実施する教員のICT面でのサポートを行うとともに、学生対応にもあたっています。

◉ノートパソコンとモバイルWi-Fiの貸与

遠隔授業の受講にあたり、ノートパソコンやカメラ、通信環境を準備できないために遠隔授業を受講することができない学生を対象に、ノートパソコンとモバイルWi-Fiの貸与を行っています。

◉図書館資料の郵送での貸し出し

2020年度に卒業論文・学位論文を提出する学部生・大学院生を対象に、図書館の資料(図書・楽譜等)を郵送で貸し出しています。

◉緊急支援奨学金(給付型)の給付

家庭の収入が減少し、生活が困窮している学生に対する緊急支援として、奨学金を給付します。「神戸女学院大学 緊急支援奨学金」は一人当たり300,000円を最大84名に、公益社団法人神戸女学院めぐみ会様のご協力による「神戸女学院めぐみ会 緊急支援奨学金」は一人当たり360,000円を25名にそれぞれ給付します。

◉前期学費納付期限の延長

5月20日を期日としていた前期学費納付期限を、今般の新型コロナウイルス感染症拡大に伴う混乱に鑑み、8月31日まで期日を延長しました。

4. その他の学生支援の取り組み

◉キャリアセンター

就活中の4年生および就活を控えた3年生を対象に、就職や進路に関する個別面談および模擬面接等をWEBツールで行っています。また、就活に関する各種対策講座については、授業の補助ツール等で利用している「Moodle」に動画をアップロードし、学生が閲覧できるようにしています。

◉カウンセリングルーム(学生相談室)

電話での個別相談の実施、および本学公式サイト上で「カウンセリングルームだより」を閲覧できるようにし、不安を抱える学生を遠隔でサポートしています。

● 本誌へのご意見、お問い合わせ：神戸女学院大学広報委員会 〒662-8505 兵庫県西宮市岡田山4-1／E-mail kckoho@mail.kobe-c.ac.jp
● 表紙解説：在学中は入学センターの「学生スタッフ」として活動した卒業生。(本編に記事掲載)